

関西学院大学博士（社会学）学位論文

ネパールにおける食肉の市場化と「カースト」の再創造をめぐる民族誌的研究
—供犠、肉売りを担う人々の日常実践を通して

中川加奈子

(2014 年 2 月 8 日博士学位取得)

本論文は、王制廃止や民主化運動、市場開放に伴い大きく変動するネパールにおいて、従来社会を規定する強い影響力をもっていたカーストはいかなる変容を遂げるのかを考察することを大きな目的としている。具体的には、国家により「低カースト」に位置づけられスティグマに苦しみながらもカーストに基づく役割を特権として食肉市場を囲い込み経済力をつけた「供犠・肉売カースト」カドギの日常実践に焦点を当て、新国家体制への移行とグローバル市場経済への包摂という大きな社会変動を受けてカーストが下から再創造される過程を、民族誌的記述をもって実証的に提示していく。

従来の研究がカーストや民族集団といった特定の集団を前提として、いわば理念的に定式化しているのに対し、本論文はカーストを制度や価値規範としてではなく、食肉市場と供犠獣の肉に焦点をあてて肉をめぐる関係性の構築、実践として捉え返し、個々のカーストという範疇が具体的な社会関係のなかでどのように生成・変成し続けているのかを動的に開示するものである。さらに、結論部において、従来の実体的範疇とみなされがちであったカーストから動態的な関係性を呼び込むための拠点としてのカーストへという新たな理解を打ち出し、南アジア地域研究史における理論的貢献を図っている。

本論文は、3部構成（第Ⅰ部 1-3 章、第Ⅱ部 4-7 章、第Ⅲ部 8-9 章）による全 9 章の民族誌と、序章、結章による全 11 章で構成されている。序章において、本書を貫く分析枠組みである、カースト間の財や金銭の交換、及びモノやカネの流れを整理しつつ、カーストを所与の前提とするのではなく、肉の市場化に伴う財とサービスの交換体系の変化とそれに伴う自己同定の単位の再解釈に関する動的なプロセスとして描くという視座を示す。その際には、関連する先行研究の流れから導き出された、一定の人々の間で理解が共有された役割としての「であるカースト」と、人々が対他関係のなかで断片化した行為としての「するカースト」との相互補完関係に注目するという分析視角をもって、カーストが下から再解釈されていく過程と、それが大きなネパールの社会変動に接続し現実の民族範疇として具現化していくプロセスを捉える。そのために大きく次の 3 つの調査課題を設定する。

第一の課題は、カドギたちが日常生活をおくる生活の場において、街や村などの一定範疇においてカースト間で共有された「であるカースト」としてのカドギたちのカースト役割はどのようなものか、主にカースト間の財とサービスの交換の成り立ちから検討してい

くことである（第Ⅰ部）。

第二の課題は、市場化に伴い従来の地域の範囲を超えて肉が流通することに伴い、どのような社会関係の変化が生じ、カドギのカースト役割がどのように再編されていくのかを明らかにすることである（第Ⅱ部）。

第三の課題は、民主化により民族やカーストをめぐる政治体制が大きく変化するなかで、国家的枠組みへの包摂を念頭に、カドギたちがカーストをどのように再解釈し、実践し直しているのか、「するカースト」の様相と、それがどのようにネパールの社会変動に接続しているのかを明らかにすることである（第Ⅲ部）。

第Ⅰ部では、「であるカースト」としてのカドギたちのカースト役割はどのようなものか、主にカースト間の財とサービスの交換の成り立ちから示す。第 1 章では、中央政府によるカーストの制度化の歴史的展開と、カドギをめぐるカースト間の財やサービスの交換の在り方を明らかにする。第 2 章では、カドギたちの儀礼面でのカースト役割と信仰空間を検討する。第 3 章では、父系親族で集住し職住一体型で肉売りを営むカドギの生活形態と、民主化運動以降結成されたカースト団体 NKSS により、街、村を超えて広域の「我々カドギ」意識の形成が促されている様相を明らかにする。以上のように、第Ⅰ部を通して、カーストという範疇が、中央から規定されて形成されてきた制度的側面であると同時に、儀礼的役割分担と一体となった地域の範囲のなかで人々の日常的実践を介して常に捉え返されるものとして実践する側面ももっていることを示したのである。

第Ⅱ部では、グローバル市場に取り込まれることで、カドギのカースト役割がどのように再編されていくのかを示す。第 4 章では、インドとの国境沿いに家畜定期市が形成されたことをきっかけに、肉を取り巻く社会関係が、儀礼的なものと市場のものが入り混じった形になるに至る経緯を明らかにする。第 5 章では、もともとカドギが中心的に扱っていた水牛に加えて、鶏、ヤギ、豚などの品目が、他カースト、他民族により持ち込まれ、食肉市場がさまざまな民族・カーストの価値観が混交した形で形成されている様相を示す。さらに、様々な規範がカースト団体を媒介として創りなおされるプロセスを検討する。第 6 章においては、行政による衛生指導や、冷蔵庫や屠場の改良などを経て、肉食観や仕事観がグローバル基準に変化していく様相を明らかにする。第 7 章では、供犠獣の肉の分配に市場がどのように影響しているのかを検討するとともに、カースト役割が市場に応じて組み換えられていくプロセスを描く。以上のように、第Ⅱ部を通して、主に食肉の市場化に焦点をあてながら、カドギたちがカースト役割を一見踏襲しているようにみえながらも、自分たちの利益や名誉を守るものを断片的に取り込み、組み替えられていることを実証的に示したのである。

第Ⅲ部では、新国家体制への移行に伴いカーストをめぐる政治体制が大きく変化するなかで、国家的枠組みへの包摂を念頭に、カドギたちがカーストをどのように再解釈し、実践し直しているのか、「するカースト」の様相と、それがどのようにネパールの社会変動に接続しているのかを示す。第 8 章においては、日常的な交渉のなかでカドギ自身がカース

トをどのような文化資源として読み替えているのか、カドギによる名乗りのポリティクスの様相を明らかにする。第9章では、カースト団体 NKSS に焦点を当て国家体制の変動にカドギたちの「するカースト」がどう接続しているのかを示す。こうして、カーストと関係のない世界に直接つながるカドギたちが増加する一方で、カーストを踏襲しながら文脈の異なるものがこれに取り込まれ、カースト自体が変成していくメカニズムを描き出したのである。以上のように、第Ⅲ部においては、数度の民主化を通してより広い社会的文脈に接続することで対外的・対内的な相互交渉が起こっており、その中で、その都度最大限に利用するためにカーストが戦略的に流用され、流用しているカースト自体も変わっていく動態を示した。こうして生活面において、労働面において、そして経済面において、様々な次元における人々のヨコの紐帯が形成されつつある状況において、幾層にも形成されたネットワークの中で最もふさわしいものをその場その場で取り込みながら、質的に新しいカーストが、不断に再創造されているのである。

以上のように、グローバル市場への包摂や新国家体制への移行を、人々はどう生き抜き、カーストはどのように捉え返されるかを、カドギに焦点を当てて実証的に示した。カドギたちは、食肉の市場化に伴う経済的特権と「不浄」「低カースト」とみなされることに伴う文化的スティグマのジレンマに折り合いをつけるべく、地域に固有の役割を遂行することと、グローバル基準での合理性や平等といった個々人による普遍的価値の追求という異なった志向をもつ二つの動きがもたらす関係性を、共にカーストに取り込んでいることが明らかになった。つまり、これまで実体的な所与の範疇とみなされがちであったカーストに、人々は、グローバル市場に対応する際に様々な価値の狭間に立ち現われる、己の生のあり方に振れ幅をもたせながら肯定するための 緩衝地帯としての意味を見出し、またそのように再創造し続けていることを実証的に提示したのである。

以上の豊富なデータに基づく詳細な記述は、冒頭の南アジア研究史上の貢献に留まらず、複数の価値観の混淆状況をいかに生き抜いていくのか、グローバル化時代の生の肯定のあり方へと議論を大きく展開していく可能性に開かれている。

以上